Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-07

巻頭言

西垣, 和

(Citation)
海事資料館研究年報,25

(Issue Date)
1997

(Resource Type)
other

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005686

巻　頭　言

海事資料館館長　西　垣　　和

わが国の大学では図書館に、書物や学術雑誌等を保存・管理し、教育研究の利用に供することを定めている。ところが、標本・模型・装置・実物・絵図等の物資料については特に基準はない。そのために今日まで、多くの大学に博物館は設置されていないし、資料保存のために必要な予算も学芸員も付けられていない。しかし、大学での教育研究にとって、文字資料と共に物資料はたいへん有用である。学理・学説を打ち立てるに至った物資料に直接ふれて、物証的に自らの研究課題を追究したり、教育を受けたりすることも極めて有効な方法である。また科学技術や社会の進むべき方向性を定めるにも、われわれの国の文化にしっかり根ざしたものでなければ、今後何百年に亘る堅実な発展は望めまい。この様な観点からは、教育立国・科学技術立国を標榜しているわが国の学術的資料の利用法に対する基準には、いささかアンバランスな感がある。

大学博物館に対する諸外国の考え方は、わが国とはずいぶん違っている。昨年訪問したお隣の韓国海洋大学校では、総合大学として認められる為に博物館の設置が義務づけられていたし、欧米でも University Musium を設置して、広く利用に供している大学が多い。

このように見てくると、本学が開設当時から海事博物館の附設をその構想の一つに掲げて、現在の海事資料館にまで充実させてきた地道な努力は大いに評価されてよい。

その海事資料館を博物館に出来ないかとよく耳にする。もっともな考えである。しかしそのためには、現在収蔵している資料について歴史的・学術的価値の評定の仕事を進めるとともに、系統立った整理と教育的配慮に基づいた展示、あるいはインターネットによる電子化情報の提供などを、従来にも増して活発にして行かなければならない。また併せて新しい海事資料や情報の収集、データベース化、調査研究の実施も必要である。さらに海事博物館を実現するためには、何よりも多くの本学構成員の理解が得られることが大切である。このような努力の積み重ねの結果として将来、本学が世界の海事大学の中で広くＣＥ（Center of Excellence）と目され、最も注目されているであろう日に、海事博物館は大学の大切な基盤設備の一つとしてキャンパスで輝いているはずである。